

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年9月16日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科行動文化学専攻

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 朴 允 姫

助成の種類	平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	第17回ヨーロッパ発達心理学会大会	
発表題目	情動に関する具体的心的状態語は幼児の情動認知に影響を与えるのか？ DOES CONCRETE MENTAL STATE LANGUAGE ABOUT EMOTIONS INFLUENCE CHILDREN'S PERCEPTION OF EMOTIONS?	
開催場所	University of Minho(ポルトガル・ブラガー)	
渡航期間	平成27年 9月 6日 ～ 平成27年 9月14日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(ポスター、認定書)	
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円
	使用した助成金額	350,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空費：163,010円
		学会参加費：50,000円
滞在費：137,500円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回の助成のおかげさまで、私の研究に対する様々なよいコメントを世界の研究者から頂くことができました。また、私の研究分野の研究者との交流があり、本当によい経験になりました。本当に、ありがとうございます。今後、他の学会参加の機会がありましたら、また申請したいと思います。	

成果の概要

所属：文学研究科行動文化学専攻心理学専修 博士後期課程3年

報告者名： 朴 允姫

1) 研究集会紹介

第17回ヨーロッパ発達心理学会はポルトガルのブラガーに位置するミンホ大学(University of Minho)で5日間開催されました。この学会は、ヨーロッパ発達心理学協会が主催する学会であり、約200件以上の研究発表が行われました。

2) 本人の研究発表とコメント

私のポスター発表は9月11日金曜日16:30から「言語、コミュニケーション」セッションで行われました。「言語、コミュニケーション」は、乳幼児の言語発達と養育者の関係を調べる研究が多いセッションであり、今年は養育者の経済的能力や母子・父子コミュニケーションのタイプが乳幼児の言語発達に与える影響や、情動と言語の関連性から子どもの社会性発達を調べた研究が主に発表されました。

今回、私が発表した研究のテーマも母子コミュニケーションと子どもの情動理解能力の関係を言語と情動の関係性から調べたものであり、本人の研究に関係する様々な研究を経験することができました。

私が発表した研究内容は、子どもが相手の顔を観察する際に、顔の情動についての具体的な情報(情動が生じた理由や状況の説明)が言語的に提供される場合、子どもの情動知覚が変化するかをプライミング課題を用いて検討することでした。実験1には5才児41名が参加し、実験2には3才児28名が参加しました。結果によると、顔刺激に対する子どもの知覚は5才児の場合具体的な言語情動があると変化しましたが、3才児では言語情報の影響が見られませんでした。また、3才児においては課題の成功率が子どもの言語能力と相関し、子どもの言語的理解力が課題の成績と関係があることを確認できました。そして、今までの研究結果と現在行っている実験に関して多様なアドバイスをもらえることができました。以下に頂いたコメントを記載いたします。

- ① 実験1の場合、子どもの認知能力を調べる課題や運動抑制能力調べる検査を行わなかったため、子どもがもともと持っている認知・運動能力がプライミング課題の成績に与える影響を追加的に調べる必要がある(WNさん, Department of Psychology, George Mason University, USA)。
- ② プライミング課題の刺激として使われた文章のモーラの数をより正確にコントロールした方が良い(TKさん, NTT Communication Science Laboratories, JAPAN)。
- ③ 顔刺激に対する子どもの知覚に変化がある場合、その刺激を記憶することにも影響が維持される可能性があるため、記憶課題を行ってみてもよいと思う(MKさん, University of

Gdansk, Poland)。

- ④ 言語的情報により刺激の知覚に変化があると言うことは、その刺激に対する生理的反応も変化することを意味する。従って、NIRS や ERP などの研究方法を用いて子どもの脳反応を観察したら、言語的情動による情動刺激のモジュレーションの変化を確認することが可能である(MK さん、Psychology Department, Croatian studies, University of Zagreb, Croatia)。

3) 研究に関する国際交流の成果

今回の学会でアメリカ・ジョージメーソン大学の博士研究員の方と出会うことができ、研究に関する議論を行いました。彼女の指導先生である Denham 教授は、1980 年代から情動に関する母親の言語的表現が子どもの情動発達に影響を与えるということ主張した方で、母子コミュニケーションと子どもの情動発達の関係研究の専門家です。今後の研究計画について Denham 教授の博士研究員と相談した結果、実際子どもの母親がどのように情動を子どもに表現するのかを調べる必要があるということを実感し、母子コミュニケーションの中で情動的発話を計測する方法について勉強しました。また、母子コミュニケーションのタイプをコーディングするために Denham 教授のラボで使用している指標を共有できるように議論しました。母親と子どもの自由コミュニケーションを観察して、母親の情動発話タイプを計測することは専門的知識と経験を要するものであるため、今回の交流のおかげでそれに関する多様な有益な情報を収集することができました。また、今後日本とアメリカの母親を対象にし、母親の情動表見の文化差を調べる共同研究を行うことを計画しました。

4) 今後の計画

今回の学会で得たコメントやアドバイスに基づいて、追加実験を行う予定です。まず、子どもの記憶課題を行い、情動に関する具体的な言語情報が顔の表情認識に与える影響が子どもの記憶まで維持されるのかを観察する予定です。また、後期から情動に関する具体的な言語情報が情動刺激に対する脳反応に与える影響を調べるため、脳波計測研究(5才児を対象)を行う予定です。

(終)